

高層マンションのエレベーター内、赤坂一華の女性秘書は悩んでいた。
一華が変わってしまった。かつての鋭すぎる一面がなくなり、マイルドになっている、と。
秘書と彼女は、まだ会社が小さい頃から支え合ってきた仲であり、彼女の鋭さに恐ろしさを感じつつ尊敬もしていた。
それにも関わらず、ここ半年の一華は、例の彼のせいかマイルドになってしまった。部下からは現在の方が評判がいいのが、秘書にとってはまた厄介な状況だといえた。
「そんなにいいのかしら……」
漏れた言葉にハッと口を押さえたのと、エレベーターが到着音を鳴らしたのは同時だった。
すぐ目の前にある玄関ドアにカードキーをかざし、中に入る。
「一華ー」
名前を呼んでもすぐには出てこない。秘書にはおおよその見当がついていた。彼と直前までいちゃいちゃし、満足してからでなければ出てこない、と。
マンションに入る時、エントランスに入るため開錠してもらったが、その時に聞いた声は妙に艶っぽかった。
その時も楽しんでいたに違いない、と秘書は確信している。
廊下を進み、リビングで待つことにした秘書。
「男か……」
一華がぞっこんである彼の姿を秘書は一度も見たことがない。だが、どんな人物であるかは彼女から散々聞かされていた。そのせいで、聞きたくもない二人の夜の事情まで知っており、お楽しみの想像の解像度が日に日に上がってしまっている。
時には、秘書自身が一華に成り代わった妄想として。
「なあに？ あなたも欲しくなっちゃった？」
現れた一華は、明らかに男物で大きめのスウェットを着て、生足を晒していた。漏れ出る色香をまったく隠せておらず、同じ女性の秘書であっても引き寄せられそうになるなにかがある。
「……お楽しみだったようで」
「うふふっ、それはもう、楽しかったわよ？」
皮肉を込めたつもりがまったく効かず、溜息が漏れる。
その時、一華の背後から一人の男が姿を現した。上裸姿だったため、秘書は思わず目を逸らしてしまった。
「一華、あっ……、どうも……」
「……もう、なんで出てきてるの？ さっき言ったでしょ？ 出てきちゃダメだって」
「ごめん……」
会話もそこそこにキス音がリビングに響き渡り始め、秘書はますます所在をなくしてく。だが、明らかに長すぎた。
「ちょっと……、いつになったら終わるの？」
抗議の声に対し、たつぷりと余韻を残して音はしなくなった。男が遠ざかる足音を聞いて、視線を戻す。
「……ごめんなさい、夢中になっちゃった。ふふっ……」
「絶対わざとでしょ、もう……」
ようやく見れた一華の顔は、幸せオーラいっぱいので溢れており、秘書は少しだけ羨ましくなった。
「あなたも病院に行ってみれば？ きっといい人が見つかるわよ？」
一華から話は聞いていた、病院。秘書はいい人を見つけた将来を想像し、喉を鳴らした。

完